

東アジアにおける『無人島大王』という訳本について

李 云

Translations under the Title of *Munintōdaiō/Wurendaodawang* in East Asia

LI Yun

The purpose of this paper is to clarify the cultural interactions in East Asia by focusing on two versions of translations under the title of *Munintōdaiō/Wurendaodawang* (無人島大王 ; original title: *Robinson Crusoe*) at the end of the 19th and beginning of the 20th centuries. In early modern East Asia, both Japan and China experienced revolutions in writing. These translations were not only a part of those revolutions in each country, but they also constituted a type of cultural interaction between the two countries. The Chinese translator had studied in Japan. She was influenced by the Japanese translator's work. But we can see more aspects than that by comparing the two works. One is the features of the Japanese version and how they differed from those of previous Japanese translations. The other is the features of the Chinese version, including the translator's revisions to make the work more understandable to a Chinese audience. The study findings may serve as a basis for research on *Robinson Crusoe* in early modern East Asia.

キーワード：文化交渉，無人島大王，翻訳，文体

はじめに

*Robinson Crusoe*¹⁾ はイギリス人作家デフォー (Daniel Defoe) によって書かれた小説である。「『ロビンソン・クルーソー』は近代的なりリアリズムの手法による作品で、海、船、漂流、無人島、冒険的な事件といった海洋冒険小説の要素をふんだんに持っており、冒険小説の元祖となった」²⁾。この小説は三部からなっているが、世間によく知られたのは第一部と第二部のみである。1719年4月に第一部の *The Life and Strange Surprising Adventures of Robinson Crusoe, of York Mariner* が出版されて、大人気であった。数ヶ月後に第二部、つまり続編 *The Farther Adventures of Robinson Crusoe* が出版されて、

1) 東アジアにおける訳本のタイトルがそれぞれ違っているため、本稿では英語の *Robinson Crusoe* で表記する。

2) 三宅興子『イギリス児童文学論』(株式会社翰林書房, 1993年), 8頁。

また高い人気が出た。その人気ぶりを究明すれば、「難破した船乗りの物語において、デフォーは人間の心の最も強力な琴線に触れることに成功した」³⁾ というわけである。次の年、第三部の自省作 *Serious Reflections of Robinson Crusoe* が出版された。しかし、前二回の人気には及ばなかった。

Robinson Crusoe が出版されて、国内だけではなく、海外でも人気を呼んだ。訳文のほかに、外国人の手によって描かれたオリジナル挿絵が付いているバージョンもある⁴⁾。東アジアにおける訳本の中に、第三部を翻訳したのは大変めずらしく、翻訳されたものはほとんどが第一部と第二部である。また、訳本の中に、梗概と言って良いものがあり、全篇まで詳しく訳したものもある。さらに、内容の削減や、語り手の視点変更など様々な形で *Robinson Crusoe* が変貌した後で東アジアに伝えられてきたものもある。

Robinson Crusoe が初めて東アジアに翻訳されたのは19世紀半ば頃のことである。その後、様々な訳本が相次いで出版された。筆者の調べたところでは、明治時代が終わるまでに日本語の訳本は26版⁵⁾ がある。ほぼ同時代に、中国語に訳されて刊行に至った *Robinson Crusoe* は7版がある⁶⁾。その翻訳版の中で、日本と中国の間に文化交渉が確実に行われた。本稿はその中の関連性が強い二つの訳本を分析したい。一つは日本語に訳した小波版の『無人島大王ロビンソン漂流記』⁷⁾ であり、一つは中国語に訳した紅絨版の『無人島大王』⁸⁾ である。この二つの訳本の間で発生した文化交渉を明らかにしたうえで、その文化交渉の結果となった要因をめぐって論じたい。

一、小波版と紅絨版の出版について

紅絨版の *Robinson Crusoe* は『民呼日報』（英語表記：THE PEOPLE'S WAIL）の副刊『民呼日報圖画』に発表されていた。紅絨版の *Robinson Crusoe* は発表してからすぐに忘れ去られてきた。しかし、紅絨版の *Robinson*⁹⁾ は中国の文化に受け入れられるため、日本化された *Robinson* のイメージをさらに儒

3) ジェイムズ・サザランド (James Sutherland) 著、織田稔・藤原浩一訳『『ロビンソン・クルーソー』を書いた男の物語——ダニエル・デフォー伝——』（ユニオンプレス、2008年）、311頁。

4) 例えば、1840年フランス人画家グランヴィル (Grandville, 1803-1847) によって描かれた挿絵がフランス語訳本に用いられた後で、グランヴィルの挿絵入りのイタリア語版や、英語版などが続々出版された。1883年に井上勤によって日本語に訳した版にあるのはグランヴィルの挿絵である。

5) 本稿の付録1。ただし、1900年8月に少年世界臨時増刊（第6巻第9号）として刊行された石井研堂作の『少年魯敏遜』は日本の伊豆で展開したため、*Robinson Crusoe* の訳本ではないと筆者は判断した。

6) 本稿の付録2。

7) 巖谷季雄『無人島大王ロビンソン漂流記』（博文館、1899.5）

8) 紅絨『無人島大王』（新聞紙：民呼日報圖画、1909.4~5）。ただし、己酉（1909年）四月二十八日民呼日報圖画「無人島大王（三）」と己酉（1909年）五月初三日民呼日報圖画「無人島大王（八）」が欠陥している。

9) 東アジアにおける訳本では、主人公の名前をそれぞれに訳した（筆者の統計によれば、合計15種類の訳名がある。「魯敏遜嶮瑠須」、「魯敏遜屈律西」、「ロビンソン狗兒僧」、「ロビンソンクルーソー」、「魯敏遜克爾騷」、「ロビンソン、クルソウ」、「ロビンソン、クルウソー」、「ロビンソン、クルソー」、「ろびんそんくるーそー」、「辜蘇」、「勞下生克羅沙」、「克魯沙」、「克祿蘇」、「魯濱孫柯洛蘇」、「魯賓孫」）ため、本稿では主人公のことを英語の「Robinson」で表記する。

家文化に迎合したうえで生じた人物像である。したがって、もう一度確認する価値があると考えられる。まずは、その出版物を見てみよう。

『民呼日報』は中国同盟会メンバー于右任によって、上海租界に出版された総合的な新聞である。同盟会の綱領と欧米の社会政治学説などを紹介するほかに、自然災害の報道も多い。民衆の悲惨な生活を語っている。まさに第一号「本社啓事」に書いてあるように、「本報實行大聲疾呼為民請命之宗旨」¹⁰⁾である。しかし、新聞に載せられている内容は清朝政府における官僚の不作為や、汚職などに関するため、外部からの力で停刊させられた。1909年3月26日に創刊されてから、1909年8月14日停刊されるまで、僅か92日間である¹¹⁾。故に、紅絨版の *Robinson Crusoe* は発表してからすぐに忘れ去られてきたことになった。

それに対して、小波版の *Robinson Crusoe* は長く読まれていた。筆者の調べたところでは、小波版の *Robinson Crusoe* は単行本として出版された後、1905年、1907年、1908年に再版の形で刊行されて、1917年に『世界お伽噺：合本』に収録されて8版まで刊行されて、1921年に『袖珍世界お伽噺』に収録されてまた7版まで刊行された。小波版の出版社である「博文館」は、今も日本で大手の出版会社と言える。明治時代には富國強兵の時代風潮に乗り、数々の国粹主義的な雑誌を創刊するとともに、取次会社や印刷所や広告会社や洋紙会社などの関連企業を次々と創業し、日本最大の出版社として隆盛を誇った。

その時代背景で、小波版の *Robinson Crusoe* と紅絨版の *Robinson Crusoe* は全然違った運命を背負っていた。まさに近代における中国と日本の縮図である。

二、訳者である二人

紅絨は一九〇三年の夏に日本に留学し、東京府女子師範學校に通っていた。一九〇七年の秋に、病で帰国した。昔の友達の要望で女子に対する教育に取り掛かった。また、授業が暇な時に、生徒の要望で小説の翻訳にも着手し始めた¹²⁾。しかし、紅絨について資料はまだ少ないため、これ以上詳しい情報はまだ明確ではない。

巖谷小波は、明治三年六月六日、東京麹町区平河町五丁目に生まれた。本名は季雄である。小波は雅号で、はじめは漣山人と書いていたが、これを〈しづく山人〉とあやまり読まれているのを聞いて、明治二十七、八年頃から〈小波〉の字にあらためた¹³⁾。

小波の父は巖谷修で、旧近江水口藩の医師であったが、明治維新には藩内の勤皇家として活躍し、太政官の内史を務めていた。上の二人の兄が工学の方をころざしたので、家業の医学を継ぐ役が小波に押し付けられた。しかし、小波自身からいえば、周りの文学的雰囲気感化で、文学が好きであった。

10) 黄季陸『中華民国資料叢編民呼日報』（中國國民黨中央委員會黨史史料編纂委員會，中華民國五十八年）（1969年），2頁。

11) 参照：韓叢耀等『中国近代図像新聞史1840～1919』（南京大学出版社），447頁。

12) 参照：崔文東「翻譯、國族、性別——晚清女作家湯紅絨翻譯小説的文化譯寫」（『中国文哲研究集刊』第五十期），2頁。

13) 参照：上笙一郎『児童文学の散歩道』（株式会社理論社，1980年），129頁。

父は小波を友人の杉浦重剛の塾に入れ、文学への志望を断念させようとしたが、これはかえって逆の結果を生んでしまった。小波は修身の本を火のなかに投げ入れてしまい、それで文学への意志あらわしたので、ついには杉浦重剛が父に執りなして、そこでいよいよ彼は公然と文学の道に進めるようになったのである¹⁴⁾。

1891年、『こがね丸』の処女作で、小波は博文館と組んで、様々な児童向けの文学雑誌や、叢書を刊行した。博文館創業二十周年記念（明治四十年、1907年）として「少年世界」では、おとぎばなしの懸賞募集をおこなった。選者は、小波と芳賀矢一、上田万年の三人であったが、芳賀は選評で、「今回のお伽噺審査に就いて、余の感じたことは、その西洋種の非常に多いことである。否すべての話の構造が、西洋式であることである」といって、小波の「世界お伽噺」の圧倒的な影響を指摘した。そして、「すべてが、日耳曼式で、巖谷式で、実は採点の標準にも苦んだのである、茲に至って、余は明治のお伽噺は早くも巖谷君の勢力の下に存在するものであることを悟った。否、巖谷君の為に、子供の空想界は、全く支配されて居るものだということを悟った」と述べている¹⁵⁾。

上笙一郎の意見¹⁶⁾では、児童文学も教育と同じく国家の児童政策の重要な一環と考えられたため、その代弁者としての巖谷小波の再話作品――「日本昔噺」全二十四巻や「日本お伽噺」全百巻などは、究極のところ、思想的には子どもたちをアジア侵略戦争に駆り立てるもの、文体的にはスタティックなものにしかならなかったのである。その一方、日本における伝承文学の児童文学化は、つまり、遠く室町時代の奈良絵本にはじまり、近世初期のいわゆる丹緑本や中期以降の赤本によって少しずつ進展したと見ることができる。すなわち、奈良絵本の題材としてもっとも多かったのは『はちかづき』『ぶんしやう』『浦島太郎物語』などであり、丹緑本もまた同じ、赤本に至っては、『むかしむかしの桃太郎』『枯れ木に花咲かせ親仁』『さるかに合戦』といった具合にその過半が昔話や童話だったのである。しかし、文章にも絵にも庶民的優しさやユーモアをたたえたこれらの再話の伝統が、近代にも受け継がれなかった。

そもそも、児童文学といったら、イギリスの場合は、『天路歷程』*The Pilgrim's Progress*、『ロビンソン・クルーソー』*Robinson Crusoe*と『ガリヴァー旅行記』*Gulliver's Travels*が後世の児童文学に大きな影響を与えたと考えられる¹⁷⁾。さらに、18世紀後半にルソー（Jean-Jacques Rousseau）の『エミール』*Emile*（1762）に大きな影響を与えた。ルソーはエミールを、自然のなかで、素朴に育て心のなかから沸き上がってくる態度や言葉こそ、人間として大切なものであるとし、既成の価値観を与えず、本も『ロビンソン・クルーソー』以外は不要と考えた¹⁸⁾。

*Robinson Crusoe*は翻訳によって、東アジアの児童文学にも影響を与えたと言える。また、訳者である二人の履歴の充実度の違いから、自国への影響の大きさも確認できる。

14) 上笙一郎『児童文学の散歩道』（株式会社理論社、1980年）、131頁。

15) 菅忠道『日本の児童文学』（大月書店、1956年）、63頁。

16) 上笙一郎『児童文学の散歩道』（株式会社理論社、1980年）、23頁、24頁。

17) 三宅興子『イギリス児童文学論』（株式会社翰林書房、1993年）、23頁。

18) 三宅興子『イギリス児童文学論』（株式会社翰林書房、1993年）、25頁。

三、絵と文章の両立

紅絨版は十五日間をかけて、新聞で *Robinson Crusoe* の物語を語っていた。毎回に一つの絵がついている。また、小波版では、一冊の単行本には、表紙を含めて14枚の挿絵がついている。このような文章と絵を合わせて表現する形は、古代中国に存在していた。魯迅は『連環図画鎖談』で、「左図右史」という形は、宋元時代の小説にある「出相」と変え、明清以降は「繡像」となった。さらに、毎回の物語に絵があるものは「前図」と呼んで、目的は読者を引き寄せるため、理解力を増やそうとしている¹⁹⁾。

近代において、図像の発展が欧米に遅れていた原因は二つと考えられる²⁰⁾。一つは近代において中国の知識人や政治家は文章を重視して、絵に対しては「民間手芸」のレベルに扱われた。もう一つは印刷技術が遅れたためである。欧米は言うまでもない、同じ東アジアの日本の状況を見てみよう。

日本では江戸から明治期を通じて、木版印刷が盛んに行われた。嘉永年間にオランダより金属活字を用いる「活版印刷」が伝えられた。明治10年（1877年）前後、活版に図版を直接組み入れる方法は新聞の挿絵に板目木版を用いる単色版から始まった。最初は金属活字の組版部に図や絵を彫った木版組み合わせていたが、金属と木材では耐摩耗性に差があるため大量印刷には不向きであった。その後、耐久性の高い鉛版「ステロ版」が始まり、「電胎法」から生まれた銅や鋼の凸版を作る「電気版」が開発された。博文館の『少年文学』シリーズなど多くの刊本の単色刷の挿絵図版に、この二方式のどちらかが用いられるようになる。明治20年（1887年）代後半から30年（1897）代にかけて、日清、日露両戦争を契機に、「写真線画凸版」や「写真網目版」などが開発された²¹⁾。

中国の状況を語る前に、まず、『時報』²²⁾ (*EASTERN TIMES*) の1905年9月1日から連続三日間の広告を見てみよう。

図1で示したように、自社が使っている印刷の機械が需要を満たすことができなかつたため、他社に頼んで代わりに「鉛字」を印刷したと読者に実情を説明した。また、ロンドンの世界一の機械を発注したことも読者に伝えている。この広告から、当時上海の印刷業の実態を少し覗くことができる。機械の老化で、印刷業の発展は抑制されたのであった。

また、もう一つ1904年第五期の『四川官報』²³⁾を見てみよう。

19) 参照：韓叢耀等『中国近代図像新聞史1840～1919』（南京大学出版社），2頁。

20) 参照：韓叢耀等『中国近代図像新聞史1840～1919』（南京大学出版社），4頁。

21) 参照：鳥越信編『シリーズ・日本の文学史②初めて学ぶ日本の絵本史I——絵入本から画帖・絵ばなしまで——』（株式会社ミネルヴァ書房，2001年），90～96頁。

22) 『時報』は1904年6月12日に創刊されて、英語での名前は *EASTERN TIMES* である。日本人宗方小太郎の名義発行者で刊行されていた。上海にある政治類総合的なニュースを取り扱う新聞である。

23) 『四川官報』は1904年3月に四川官報書局によって成都で刊行および出版された雑誌である。この雑誌は四川総督錫良によって外務部からの呼びかけに応じて作られたものである。

| | | |
|---|---|---|
| <p>閱時諸君公鑒 已備用全速力仍印 不致勞君函責 鉛字檢機器 一到即一律換 用新字改其印 以</p> | <p>閱時諸君公鑒 已備用全速力仍印 不致勞君函責 鉛字檢機器 一到即一律換 用新字改其印 以</p> | <p>閱時諸君公鑒 已備用全速力仍印 不致勞君函責 鉛字檢機器 一到即一律換 用新字改其印 以</p> |
|---|---|---|

図 1

稍顯技藝之教習工頭遇事不免要求挾制此輩所由自衛工藝未講而敢
思推廣之法也又局中出款以購紙為一大宗查外洋印刷官局所需紙張均
設廠自製款式雖宜利不外溢其立論每謂紙之用數益進步則學問之程度
益進步紙廠工本至鉅眼前未易議及然不可不求其法以為後來推廣地
步且愚昧之見本局若能再添籌經費數萬金即擬遣派聽學生十名前
往日本印刷局學習鉛印電印并造紙諸藝學成即令購辦各種機器回
川專供本局印刷之用收效雖在二三年後然將來成就必可稱道南一大書
局近以供全省學堂之取求遠可以備辦封演驗之訂購推廣利益當非淺
鮮至籌款一節聞警察經費尚餘存款數萬金可否借撥以資挹注出自 憲裁
批如詳准由警察局長年節省贏餘項下借撥銀貳萬兩以資挹注仰即分移
知照 批

本局詳請委員赴日本延請印刷教習并其應用機器文
為詳請通辦理事竊 局詳請添籌經費遣派學生前往日本肄習印刷諸
藝一案二十九年十二月二十五日奉 批准由警察局長年節省贏餘項下借撥
銀貳萬兩以資挹注仰即分移知照等因奉此查即移知警察局長去後本年
正月十四日據該局將此項銀兩如數移交 局照收在案正擬招學生開
開工藝局有延請東洋工匠來川教習工藝之議 當經辦理工藝局沈署
臬司詳詢章程并與本局員紳討論食謂遣人往學與延師就教所費相等
國風尚視工藝為不足輕重聽學生多不肯遠涉重洋真習未幾不如延
訂教習來川尚可廣加教授聽我指揮 悉心籌畫所陳不為無見不得以
詳請在先不思變通辦理現會商沈臬司擬會委知縣劉煥堂從九辜慎儀前
往日本延訂鉛印石印銅印電印聯刻各工匠訂定合同兼充教習并應
用各種機器均選購來川一俟到局之日一面開辦各種印刷一面挑選聽
子弟輪班肄習總期造器成材無論圖書書籍銀幣錢鈔均能自行仿印不至
承用外人為主以仰 憲台推廣印刷諸工藝之至意所有 局前詳請
添籌經費遣派學生出洋習藝擬請變通辦理改延日本工匠來川教習并選購
機器緣由是否有當伏候 憲台批示飭遵奉
批據詳已悉仰即照委劉令等前往延訂川教習期於推廣印刷精益求精
是為至要 批

図 2

図 2 で示したように、『四川官報』に載せられた記事によると、印刷技術を学ぶことと、印刷の機械を
買うことなどは日本に行く必要がある。この時期の四川省の印刷業はまだ日本に遅れていることが確認
できる。以上の二つの記事で、当時中国の印刷業全体が遅れていたことが確認できる。それゆえ、紅絨
版の *Robinson Crusoe* は簡単に単行本にならなかったと考えられる。また、有力な支えがなかったこと
は見逃せない重要な原因だと考えられる。

四、原作やほかの訳本との距離

イギリス人が書いた小説を東アジア人の手によって翻訳することで、原作とは違っているところから東西文化の相違も明らかに見えると考えられる。

小波版は『世界お伽噺』シリーズの第五編、英國の部に収録された物語である。「^{かいだい}解題」では、小波はこの物語の原型を紹介した。「無人島大王とは、『ロビンソン漂流記』のことです。」という説明がある。筆者の調べたところでは、この本が刊行される前に、つまり明治32年（1899年）5月前に出版された日本語訳本の中に、『ロビンソン漂流記』というタイトルを持っている訳本はなかった。「ロビンソン」という呼び方は、日本語訳の最初の版本から用いられており、ただし、当て字あるいはカタカナでの表記の違いにすぎない。例えば、「魯敏孫」という表記の横に、「ロビンソン」というカタカナが記されている。1887年に刊行された牛山良助版では、「魯敏遜」と表記されたが、横のカタカナは相変わらず「ロビンソン」になっている。それでは、「漂流記」という構成のタイトルは、1883年に刊行された井上勤版の『魯敏孫漂流記』である。その後、前述した牛山良助版のタイトルは『新譯魯敏遜漂流記』である。1894年に刊行された高橋雄峯版のタイトルは『ロビンソンクルーソー絶島漂流記』である。カタカナと「漂流記」両方の登場は初めてだが、「絶島」も加わった。つまり、「^{かいだい}解題」で挙げた『ロビンソン漂流記』は一つの特定の訳本を指すわけではないことが確認できる。

次に、「^{かいだい}解題」でこれより前に刊行された訳本について、「何れも^ど長過ぎたり、^{ながす}堅過ぎたり」と評価を与えた。前述した訳本は、確かに長い文章である。例えば、井上勤版は410頁あり、牛山良助版は178頁ある。さらに、高橋雄峯版は上中下の三巻で、合わせて489頁もある。言わば原本である *Robinson Crusoe* は前述で紹介したように長編小説であるから、「^{ながす}長過ぎ」るのも当然だと考えられる。しかし、ここでの「^{かたす}堅過ぎ」は、日本語における言文一致の運動と関わっていると考えられる。それは江戸時代の幕藩体制という閉鎖的かつ自給自足の社会体制から、明治政府という近代統一かつ欧米に似る国家へと変貌する時代に、言語において生じた革命と言える。

日本語がはじめて〈国家のことば〉になったのは、やはり明治であるといえよう。このことを雄弁にものがたるのは〈国語〉ということばである。いまでは、漢字文化圏へひろく輸出されて通用しているこのことばではあるが、その製造元が日本であったことには、東洋でいちばん早く近代国家として急速に進展したその国家が日本であることを考え合わせると、少なからぬ意味がある。すなわち、〈国語〉を要求したのは、新日本の国家統一である。そこには、もとより、政治の背景があった以上、明治政府を中核とする当時の支配層がその〈国語〉ととりくんだことも、また当然であった²⁴⁾。

ということで、言文一致の運動は慶応2年（1866年）12月、当時開成所反訳方であった前島密が將軍慶喜に〈漢字御廃止之議〉を建白した時にはじまる。本格的な動きは明治十八年（1885年）一月〈羅馬字会〉が結成されたいわゆる鹿鳴館時代である。さらに、言文一致の開花はヨーロッパ文学の紹介のはじまりでもあった。しかし、外国語の翻訳は、教室の漢文訓読流逐語訳になってしまった。漢文訓読体

24) 下中邦彦『日本語の歴史全8巻6 新しい国語への歩み』（株式会社平凡社、昭和40年）（1965年）、28頁。

も *Robinson Crusoe* の早期訳本の一つの特徴である。そもそも、言文一致の運動とは、次のように解釈される。

言文一致の運動は、日本の口頭言語（話しことば）と書記言語（書きことば）とがあまりにへだたり過ぎているのを、簡便な口頭言語のほうに統一して言語生活を合理化しようという、まったくの実利の主張としてスタートした²⁵⁾。

しかし、どの言語でも、口頭言語は外向性の特徴を持ち、書記言語は求心性の特徴を持っている。伝達と認識の差として、すべての言語は共通して、根本的に言文の不一致さを持っている。ただし、当時の日本語におけるのは、その不一致があまりにはなはだしいところに問題があった²⁶⁾。それゆえ、小波は前の訳本を「堅過ぎ」と評価した。ここでは、あえて前の訳本の冒頭の部分を刊行の年代順に小波版と並べてみる。

井上勤版：予ハ紀元一千六百三十二年ヲ以テ英吉利國ヨーク府ニ生レタリ²⁷⁾

牛山良助版：話説す魯敏遜克爾騷ハ紀元一千六百三十二年を以て英國ヨークの町に生まれたる²⁸⁾。

高橋雄峯版：余は千六百三十二年ヨーク町に生まれたるもの²⁹⁾。

小波版：今から三百年ほど前の事で、英吉利のヨークと云ふ處に、ロビンソン、クルウソーと云ふ人が在りました³⁰⁾。

以上挙げたように、言文一致の歩みが確認できる。今から見れば、小波版のほうが一番読みやすいバージョンであることが確認できる。確かに、「短かく、易しく書いて見ました」のように完成した。

また、原作は主人公 *Robinson Crusoe* の口調で、つまり第一人称で物語を語った。訳者井上と高橋は原文のままに訳したことがわかる。それに対して、牛山と小波は第三人称の視点を選んで語った。紅紬は中国語に訳したときにも第三人称の視点で物語を完成した。

五、小波版に基づいた変貌

小波版と紅紬版の関連性は一目瞭然なことである。紅紬版は全部で15回のストーリーからなっている。毎回の物語に一つの挿絵が付いている。しかも、すべての挿絵は小波版で似た絵が見つけれられる。それに、前後の順番も一緒である。ここで、一つの例を見てみよう。

25) 下中邦彦『日本語の歴史全 8巻 6 新しい国語への歩み』（株式会社平凡社，昭和40年）（1965年），177頁。

26) 参照：下中邦彦『日本語の歴史全 8巻 6 新しい国語への歩み』（株式会社平凡社，昭和40年）（1965年），177～179頁。

27) 井上勤『魯敏遜漂流記』（長尾景弼，1883），1頁。

28) 牛山良助『新譯魯敏遜漂流記』（和田篤太郎，1887），1頁。

29) 高橋雄峯『ロビンソンクルーソー絶島漂流記（上巻）』（博文館，1894），1頁。

30) 巖谷季雄『無人島大王ロビンソン漂流記』（博文館，1899），1頁。



図3

図3の左は小波版の表紙であり、右は紅絨版の第一回の紙面である。絵の構図から見ると、四角の枠に中心より偏った位置に丸い円がある。その円に囲まれた部分がこの図の焦点となる。円の周りに波と雲を象徴する波線がある。さらに、焦点となる人物は少年の模様で、地面に右向けに座っている。少年の左手が下に垂れて、五本の指もはっきり見える。手首のあたりに袖の裾が巻いてある。少年は礼装用の帽子を被っていて、目線が手元に置いてある汽船の模型に向いている。紅絨版の資料は不可抗力の原因で、色あせてははっきり見えないが、もし輪郭に沿って、イメージで足りなかった部分を補充してみると、両版の絵は意識的に同じような雰囲気を作り出そうという意図が確認できる。また、紅絨版の右側タイトルの下の署名のところ、「小波節譯 紅絨重譯」と記載されているから、紅絨版は小波版に近づけようとしたということがわかる。紅絨は小波版を選んで中国語に翻訳した理由は、崔文東氏（2017）³¹⁾の指摘したように、紅絨本人は家庭系文学および戦争系文学が好きで、巖谷小波の戦争系文学が気に入ったから、ついでに彼によって訳された童話も視野に入ったと解釈した。また、清末には「冒険精神」がよく知られているモラルとなって、航海者Robinsonには「冒険」の要素があり、まさに完璧なヒーローの立候補である。そして、紅絨はRobinsonを「国を愛する忠勇な国民」というイメージに書き換えた後で、この冒険譚を革命派の宣伝メディアである『民呼日報』の副刊『民呼日報图画』に発表した。

紅絨版は小波版に基づいて翻訳を行ったが、訳文に相違している点がいくつかある。大体は3種類の相違がある。一つは内容の増加、一つは内容の削減、一つは新語の使用である。それでは、具体的な例を見てみよう。

紅絨版の第一回の冒頭部分の小波版になし、訳者紅絨によって加えた文章である。崔（2017）の意見では、この増加した冒頭部分は「冒険精神」を主張するために、わざと梁啓超の『論進取冒険』を真似した仕業である³²⁾。また、小波版では、「幼少い時分から、船に乗って遊ぶのが、何より好きでありまし

31) 参照：崔文東「翻譯、国族、性別—晚清女作家湯紅絨翻譯小説の文化譯寫」（『中國文哲研究集刊』第五十期），6頁，11頁。

32) 参照：崔文東「翻譯、国族、性別—晚清女作家湯紅絨翻譯小説の文化譯寫」（『中國文哲研究集刊』第五十期），23頁。原文は以下のように：開篇的排比亦化用梁啟超〈論進取冒険〉之字句，旨在凸顯航海家的「冒険精神」。

たから、何卒自分は航海者に成って、一生船に乗って暮らし度いと、此事斗り考へて居ましたが³³⁾と書いてあるように、Robinsonが航海好きになったのは船に乗って遊ぶのが好きだからであった。しかし、紅絨版のRobinsonのほうは周りの雰囲気、つまり冒険小説の流行や、海外から帰ってきた商売人が語った土産話などで航海の志が芽生えた³⁴⁾。

さらに、紅絨は中国人読者のことを思慮に入れて、いくつかの箇所を書き直した。例えば、さっき挙げた小波版の訳文に「幼少い」というところがある。それはRobinsonの子供時代を一言であらましに語っている。しかし、紅絨はこの「幼少い」時期をちゃんと二つに分けて、即ち「五六齡」と「年十一二」のように分けて、そして別々にストーリー性を充実させて語っていた。前述したように、「五六齡」のRobinsonは航海の志が芽生えて、「年十一二」のRobinsonは実際に船を駆使し、志を実現しようとしていたが、年齢のせいで技が身につかず、叶わなかった³⁵⁾。

また、中国人により理解しやすくするために、紅絨はここでわざとRobinsonの「幼少い」を年齢で具体化し、加筆した。それは中国の伝統文化では「幼少い」に対して、区切りがあるから、ここであえて年齢で示したと考えられる。中国は古くから、年齢に特別な呼び方がある。この別称は主に年齢層の特徴から生まれてきた。例えば、老人の場合であれば「耳順」や、「従心」や、「鮐背」などは六十代、七十代、九十代の別称となり、児童は其の髪型からの別称が多い。例えば、「垂髻」というのは、子供の垂れた髪で、この髪型をするのは三、四歳から八、九歳の子供である。それゆえ、「垂髻」は三、四歳から八、九歳の別称となる。また「総角」は八、九歳から十三、四歳の子供の髪型（髪を中央から二分し、耳の上で輪の形に束ね、角のように結った髪型）で、この言い方は八、九歳から十三、四歳の別称となる。さらに「束髮」というのは男子が十五歳になって髪を結び、冠をつけることを指している。このように、年齢層別にそれぞれの別称がついていることから、中国人の伝統思想では、年齢に対して特定の区切りがある。故に、紅絨はRobinsonの「幼少い」時の経歴を語った際に、中国の伝統文化を意識して、「幼少い」には「垂髻」と「総角」という二つの時期が含まれているから、それを「五六齡」と「年十一二」のように分けて、中国人にわかりやすいように訳したことが確認できる。

同じように、Robinsonが無人島で生活に慣れた様子を描いた時に、陶淵明の「桃花源」³⁶⁾を例えとしてあげられた。Robinsonが敵と戦う時に、「亜夫將軍」³⁷⁾と例えた。中国人に親しい場面や人物像を使って、より理解しやすいように工夫したことが確認できる。

33) 巖谷季雄『無人島大王ロビンソン漂流記』（博文館、1899.5）、1頁、2頁。

34) 参照：崔文東「翻譯、国族、性別—晚清女作家湯紅絨翻譯小説の文化譯寫」（『中國文哲研究集刊』第五十期）、14頁。
原文は以下のとおり。湯紅絨構想了培養魯濱孫「冒險精神」的社會環境：冒險小説流行、冒險家事蹟層出不窮，魯濱孫自幼耳濡目染，胸懷大志。

35) 参照：黃季陸『中華民國資料叢編民呼日報』（中國國民黨中央委員會黨史史料編纂委員會，中華民國五十八年）（1969年）、214頁。原文は以下のとおり。「五六齡時最喜讀冒險小説或有巨賈自海外歸彼必與之談海國奇聞年十一二膽益壯有時間遊東海邊每欲駕一舟以達其航海之志顧因年齒幼不獲習駕駛以償所願」。

36) 参照：黃季陸『中華民國資料叢編民呼日報』（中國國民黨中央委員會黨史史料編纂委員會，中華民國五十八年）（1969年）、254頁。原文は以下のとおり。「四圍野花無數自此雞鳴犬吠不啻成一世外桃花源矣」。

37) 参照：黃季陸『中華民國資料叢編民呼日報』（中國國民黨中央委員會黨史史料編纂委員會，中華民國五十八年）（1969年）、294頁。原文は以下のとおり。「猝不及防斯時之克祿蘇不啻如亞夫將軍從天而降佩刀一舉百夫莫當」。

また、小波版のRobinsonは十九歳の時に、「両親に内証で自家を出て、航海者の仲間に入ってしまった³⁸⁾」それに対して、紅絨版のRobinsonは両親を口説いて、出航の承諾を得た上で、航海に行った³⁹⁾。ここで、筆者は一つ明らかにしたいことがある。それは当時の中国では、まだ伝統的な儒家思想が主導的な地位を占めていて、親不孝の人は絶対にヒーローと扱われなかった。故に、原作版のRobinsonは中国におけるヒーローのイメージと似合わなかったと考えられる。ゆえに、紅絨版のRobinsonは両親の承諾を得た上で、遠くまで航海に行った。

また、Robinsonがいつ船を操る技術を身につけたかについて、小波版と紅絨版に違いがある。小波版では、「一番最初には、同じ英吉利のロンドン府へ、船で渡って参りましたが、途中で恐ろしい暴風に會って、」⁴⁰⁾「ロビンソンは、そんな意気地無しではありません。却ってかう云ふ酷い目に遭ふほど、尚航海が面白く成り、それからは一層奮發して、航海の學問や技術を、切りに勉強しましたから、間も無く立派な航海者に成りました。」原作では、Robinsonが初めての海難に遭った時に、大変恐ろしかった。しかし、小波版はこの部分を書き換えて、知恵と勇気両方を持っている立派な青年像を描き出した。志を叶えるため、上の人に逆らうにしても、どんな難関であっても、果敢に前へ進む。それに、情勢をよく見習い、ついに主導権を手にした。そこで、技を身につけたRobinsonは船長になり、「遠くの亜利加の方まで出かけました。」⁴⁰⁾

紅絨版では、Robinsonは両親を口説いて、出航の承認を得てから技術を身につけておいて、出航前の準備できたような状態である⁴¹⁾。また、小波版にある二度の航海（ヨークからロンドンへ、ロンドンからアフリカへ）を一つにしたが、初めて海難に遭ったとき、小波版のRobinsonのように冷静な態度を取り、様々な航海技術を研究していた⁴²⁾。

以上のように、両版のRobinsonは勇敢に出航したが、二つのタイプに分かれた。一つは試練を終えて、能力を備えてから旅立った小波版のRobinsonである。一つは準備できたようだが、実際には経験なしで長い旅に出て、旅で遭った状況の中で技を学んで、身に付けようとしている紅絨版のRobinsonである。この二つタイプのRobinsonから、近代における日本と中国の様子が見える。

また、注意すべきところは、紅絨版の第十三回と第十五回の挿絵である。これは彼女自ら工夫して、その回の物語に合うように挿絵を新たにアレンジしたものである。図4は小波版にある二つの挿絵で、図5は第十三回と第十五回の挿絵である。

38) 巖谷季雄『無人島大王ロビンソン漂流記』（博文館，1899.5），2頁。

39) 参照：黄季陸『中華民國資料叢編民呼日報』（中國國民黨中央委員會黨史史料編纂委員會，中華民國五十八年）（1969年），214頁。原文は以下のとおり。「於是夙夜話二老隱為譬曲為喻務欲達其志平日之目的而後已曾不數月而父母果為所動」。

40) 巖谷季雄『無人島大王ロビンソン漂流記』（博文館，1899.5），2頁，3頁。

41) 参照：黄季陸『中華民國資料叢編民呼日報』（中國國民黨中央委員會黨史史料編纂委員會，中華民國五十八年）（1969年），214頁。原文は以下のとおり。「於是遊興勃勃磨厲以須迄十九歲而遂有第一期航海之事」。

42) 参照：黄季陸『中華民國資料叢編民呼日報』（中國國民黨中央委員會黨史史料編纂委員會，中華民國五十八年）（1969年），221頁。原文は以下のとおり。「乃乘此顛簸震蕩中研究種種駕駛術以為將來遇險之防備」。



図4



図5

原作では、Robinsonがヨーロッパに戻ったとき、両親はもうすでに亡くなった。しかし、小波版はそのエンディングを変えて、Robinsonが父に会ったようにした。紅絨版はその上で、さらに再会の場면을充実させて、一回物語の分量にした。文字の部分はフライデーと父親再会のシーンを再利用した。絵の部分は図4の示したように、図5の右の部分にした。これによって、中国人に認められた英雄像が完成したのであった。

さらに、紅絨版では、新語の用いる現象も注意すべきだと考えられる。例えば、第五回は海難から救われて島に着陸直後に、Robinsonがまだショックで落ち着いてないうちに、「夢か幻か水星か月か」⁴³⁾と嘆いた。ここでは「水星」や「月球」や「地球」や「経緯度」などが用いられた。また第六回Robinsonが着陸していた所は無人島だとわかって、落ち込んでいる自分を慰める時に、「飛行機があれば、惑星を探すに行くや、地球の両極を巡りに行く」⁴⁴⁾などの豪語を言い、無人島ぐらいの危険状況はヒーローである彼にとっては、恐ろしいものではないと強調した。ここでは、「飛行器」や、「行星」や、「両極」などが用いられた。このような名詞が初めて共に頻繁に出たのは西洋人宣教師の、あるいは宣教師と親しむ中国知識人の著作である。例えば、『新法算書』には、「諸行星可分内外二類在木星道之内者为内類如水星金星地球火星與諸小行星是也」がある。『時務通考』には「第七學習地球經緯度測向羅盤卯西弧等圈用法」がある。『六合叢談』には、「行星繞日，軌道橢員同，行星自轉，有兩極同，其面各有晝夜寒暑，其

43) 参照：黄季陸『中華民國資料叢編民呼日報』（中國國民黨中央委員會黨史史料編纂委員會，中華民國五十八年）（1969年），240頁。原文は以下のとおり。「驚日夢耶幻耶水星耶月球耶設我身猶處地球上則何以無路徑無居廬無人跡倏驚倏疑倏訝怪由是極目四周望覺海中一孤島不知處地球何經緯度」。

44) 参照：黄季陸『中華民國資料叢編民呼日報』（中國國民黨中央委員會黨史史料編纂委員會，中華民國五十八年）（1969年），247頁。原文は以下のとおり。「乃轉而自慰曰無人島乎吾若得飛行器吾將探行星搜兩極此區區之危險烏足以介英雄意」。

外各包以大氣，又同」がある。また『格致草』や『西學考略』などのなかに、前述した言葉がよく出ている。そして、『中國新女界雜誌』には、「其二女公子。一祇十八歲。一祇十六歲。長名秋影。次名虹玉。眉目秀麗。雖纖弱之軀。亦時時坐飛行器。往來南北兩極」がある。このことによって、当時西学は中国で盛んでいる様子が覗ける。

おわりに

東アジアに訳した *Robinson Crusoe* は、様々な形で存在している。本稿はその中の二つの訳本を取り上げて、比較した。近代において、中国と日本の間では、政治環境が違ったことから、印刷業の発展程度や、出版社の実力などに差が生じており、小波版の *Robinson* と紅紬版の *Robinson* が全然違った運命に行ってしまった。また、西洋文化を受け入れる時の、日本と中国との違いによって、*Robinson* の変貌したところも違った。ただ一冊の小説だが、近代における知識人は欧米を追いかけるため、新しいものを民衆に伝える際に、より効果的に、受け入れられるように、工夫したことが確認できる。

付録 1

1. 1850, 黒田麴廬, 『漂荒紀事』, 写本
2. 1857, 横山保三 (横山由清), 『魯敏遜漂流紀略』, 瓊華書屋
3. 1872, 斎藤了庵, 『英國魯敏孫全傳』, 香芸堂
4. 1878.3, 山田正隆, 『回世美談』, 巖、堂
5. 1879.4~9, 横須賀橋園, 『九死一生 魯敏孫物語』, 雑誌：驥尾團子 (第26~29, 31, 33, 34, 37~39, 41~44, 46号)
6. 1883.10, 斎藤了庵, 『英國魯敏孫嶋物語』, 三書房
7. 1883.10, 井上勤, 『魯敏孫漂流記』, 長尾景弼
8. 1887.3, 牛山良助, 『新譯魯敏遜漂流記』, 和田篤太郎
9. 1892.9, 訳者不記, 『ロビンソン、クルソー』, 雑誌：小国民 (第4年第18, 19号)
10. 1894.3, 高橋雄峯, 『ロビンソンクルソー絶島漂流記』, 博文館 (上巻, 中巻, 下巻)
11. 1898.7, 松尾豊文 (松尾豊吉), 『ロビンソンクルソー直譯註釋』, 金刺芳流堂
12. 1899.5, 大江小波 (巖谷季雄), 『無人島大王ロビンソン漂流記』, 博文館
13. 1902.8, 鈴木虎市郎編, 『ろびんそんくるーそー』, 育成会
14. 1902.9, 河島敬蔵, 『漂流者と野蛮人』, 濱本明昇堂
15. 1904.4, 佐野天聲, 『ロビンソン物語』, 富山房
16. 1907.3, 菅野徳助奈倉次郎, 『無人島日記』, 三省堂書店
17. 1908.11, 百島操 (百島冷泉), 『ロビンソン漂流記』, 内外出版協會
18. 1908.3, 佐川春水, 『ロビンソン・クルソー漂流記』, 雑誌：英語の友 (3~6月)
19. 1909.4, 學窓餘談社, 『ろびんそんくるそう冒険奇談奮闘の生涯』, 春陽堂
20. 1909.11, 鈴木正士, 『ロビンソンクルソーの話』, 英語研究社 (初等英語叢書8)

21. 1909.11, 横地良吉, 『ロビンソン、クルーソー』, 博文館, 英語世界叢書『正義の鐘』
22. 1910, 鈴木正士, 『後のロビンソン』, 英語研究社 (初等英語叢書11)
23. 1910.7, 笹山準一 (笹山狂浪), 『漂流奇談新譯ロビンソン』, 精華堂書店
24. 1911.1, 學窓餘談社, 『奮闘美談ろびんそんくるそう』, 春陽堂 (合巻)
25. 1911.5, 高橋五郎・加藤教栄, 『漂流物語ロビンソンクルーソー』, 富田文陽堂
26. 1911.9, 笹山狂浪, 『絶島奇談新譯ロビンソン漂流記』, 立川文明堂

付録 2

1. 1902, 錢唐跛少年 (沈祖芬), 『絶島漂流記』, 上海開明書店
2. 1902, 英為霖 (William Bridie⁴⁵), 『辜蘇歷程』, 羊城眞寶堂書局
3. 1902.12, 訳者不記⁴⁶, 『魯賓孫漂流記』, 雑誌:大陸報 (第1~4, 7~12期)
4. 1904, 訳者不明, 『魯賓孫漂流記』, 雑誌:廣益叢報 (第44, 60・61期⁴⁷)
5. 1905, 林紓・曾宗鞏, 『魯濱孫飄流記』, 上海商務印書館
6. 1909.4, 紅紱 (紅紱女史), 『無人島大王』, 新聞紙:民呼日報圖画 (己酉四月二十六日~五月初十日)
7. 1910.5, 周砥, 『絶島日記』, 羣益書社

45) 表紙に記された「英國教士英為霖譯」の訳者である英為霖は「William Bridie」だと判断される証拠は三つがある。

一つ、*Catalogue of Chinese Books and Manuscripts in the Library of the Wellcome Institute for the History of Medicine* に収録されている116番のカタログは『辜蘇歷程』についてである。解説のところでは「Ms. Note on cover: The Revd. Dr [C.] Wenyon with W. Bridie's kind regards.」とあるが、注釈では「Bridie joined the English Wesleyan Mission in 1882」と書かれている。(参照:Hartmut Walravens, *Catalogue of Chinese Books and Manuscripts in the Library of the Wellcome Institute for the History of Medicine*, The Wellcome Institute For The History of Medicine, 1994, 68頁)

二つ、オーストラリア国立図書館に所蔵された『辜蘇歷程』の裏ページのカバーに「J. H. Revd Esq. with translator Comfit (W Bridie) Hong Kong March 1903 Robinson Crusoe in a new docere」というノートが書かれている。(英為霖, 『辜蘇歷程』, 羊城眞寶堂書局, 1902)

三つ、「Whitehead and Selby have been invalided home; George Piercy has been compelled to retire, after thirty-two years of toil and struggle. Grainger Hargreaves (from 1878 onwards) figures on the Stations, Charles Bone (1880), William Bridie and Samuel G. Tope (1882) — each of whom has done notable work; and the beloved Roderick J. J. Macdonald is by Dr. Wenyon's side at Fatshan.」(参照:Geogre G. Findlay, D. D. and Mary Grace Findlay, M. Sc. *Wesley's world parish: a sketch of the hundred years' work of the Wesleyan Methodist Missionary Society*, Hodder and Stoughton Charles H. Kelly, 1913, 156頁)

以上の記述から、一致性と合理性が見られることで、『辜蘇歷程』の訳者英為霖は当時仏山にいるメソジスト宣教師であり、医療関係者の William Bridie であることが判明された。

46) 崔文東 (「政治與文學的角力: 論晚清《魯濱孫飄流記》中譯本」, *Journal of Translation Studies*11(2), 2008, 115頁) の論述では、訳者は『大陸』という雑誌の主筆の一人「秦力山」だと判断された。

47) 後日現地調査でより詳しい情報を補充する。